

文化協会を支える人々 (2)

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井 陽一 Yoichi Fukui

活気に満ち溢れ賑やかだった街並みも、今はひっそりと静まりかえり、まるで別の世界に来たような錯覚に陥る。新型コロナウイルスの世界的流行（パンデミック）が発生し、その中でも、ニューヨークは感染者数、死者数ともに世界で最も多くなってしまった。しかし、そんな状況の中でも人々は、助け合いながら、生活している。20年前に起きた9.11世界同時多発テロの時でもそうだったが、いつもは冷たそうに見えるニューヨークの人々も、優しさを取り戻し、他人を思いやりながら、街には温かい雰囲気漂っていた。今も、みな一つになり、力を合わせてこの難局を乗り越えようとしている。パンデミック前の状態に完全に戻ることはもうないかもしれないが、新しい未来に向かって歩みは始めている。

レストラン「おめん」と常連さん

そんな中、4月13日、ニューヨークタイムズ紙は、家族をテーマに特集を組んだ。この特集記事として、文化協会運営委員の品川幹雄さんが経営するレストラン「おめん」のことが掲載された。創業当初から著名な常連が多く、まるで家族のように集まることからスポットが当てられたようだ。

京都に本店を持つレストラン「おめん」は、日本の優れた和食文化を世界に伝え、食を通して社会に貢献したいという創業理念のもと、1981年、芸術、文化の中心地であるニューヨークに支店をオープンした。それ以来、ニューヨーカーはもとより、世界各国から集まる多くの人々に愛され、家族的な空間を提供するかけがえのない場となっている。コロンビア大学の故ドナルド・キーン先生もその一人だった。

記事は、音楽家のパティ・スミスさんが筆者となり、俳優のリチャード・ギアさんをはじめ「おめん」の常連さんたちが集まり、語り合いながら特集が組まれた。

パティさんは、「レストラン『おめん』は、ニューヨーク・ソーホー地区の宝物のような存在として発展してきた。そこには、ニューヨークの昔ながらの雰囲気や親族のような温かさ、共有感がただよ。オープン以来、芸術家や俳優、作家、ファッションデザイナーたちに愛され、40年という時の流れに大きく変貌を遂げるニューヨークの中で、変わらずそこにいてくれる」と語っている。

スコット・マーブルさん

そんな「おめん」の常連が紹介してくれたのが建築家のスコッ



写真1 左からドナルド・キーン先生、奥井俊彦主任（当時）、品川幹雄運営委員 文化協会にて1999年

ト・マーブルさんだ。当時、コロンビア大学で教鞭をとる若手設計士で、1990年、文化協会設立に向けて内装デザイン・施工に携わってくれた。文化協会の設計にあたり、同じく設計士のカレン夫人と共におぢばに帰参し神殿を丹念にまわり、おぢばの雰囲気を感じた。そして、おぢばの様子を醸し出すような設計も取り入れてくれた。

おぢばを訪れている時、ちょうどなら100年会館の設計デザインが公募されており、応募したところ最終選考まで進んで、その作品は、長くニューヨーク近代美術館に展示されていた。

文化協会の内装工事は、ユニオン（労働組合）のピケッティング（工事反対デモ）に遭い、なかなか進まず、組合本部にも足を運んだりしながら、たいへん苦勞して工事が進められた。スコットさんの辛抱強い尽力もあり、翌91年、無事に完成した。その後、95年には、建築専門誌 *Interias* で「世界で活躍する優秀な40歳以下の設計士40人」に選ばれて、ますます頭角を現すことになった。

2000年、文化協会は現在地に移転。その時も内装を担当してくれた。それは、その年の最も優れた内装デザインに与えられる「インテリアデザイン賞」を受賞した。

文化協会は、非常に才能のある方々とのご縁をいただき、誠に幸運なことだ。私たち素人だけでは、とても叶わないことも多く、ご存命の教祖が先廻りしてお働きくださっているのを強く感じている。

2008年には、ニューヨークセンターの神殿が竣工した。この時は、予算が限られているにもかかわらず、スコットさん夫妻が自ら神殿の設計を担当してくれた。そして、この神殿は、21世紀の最初の10年間に建てられた代表的な建造物の一つとして、書籍 *Guide to Contemporary New York City Architecture* にも紹介されている。

オンライン授業

感染拡大の長期化に伴い、文化協会も一時閉鎖を余儀なくされ、現在は日本語教室の大人クラスも子供クラスも、オンライン授業を行っている。どれだけの人が戻ってきてくれるかを心配したが、およそ8割の生徒が登録し、オンラインで復学している。これは、日頃から先生たちが真心で交流を続けてきてくれたお蔭と感謝している。

文化協会でも長く日本語を勉強している生徒の中には、スタッフの皆さんは家族みたいに感じるとか、ここに来ると心が安らぐと話してくれる方々もいる。

久しぶりにコンピューターを通して再会し、お互いの無事を喜び合ったり、子供クラスではクラスの再開を喜んでくれている親御さんもいる。子供同士も久しぶりに会って笑顔で手を振りあう。こんな喜びの風景が画面を通して映し出されている。

今の難局を乗り越えながら、文化協会もニューヨークの人々にとって、かけがえのない家族のような温みを提供できる場として成長していきたいものと願っている。



写真2

スコット・マーブルさん